

実習の動機付けを高める演習の検討

—基礎看護学実習Ⅱ直前演習の試み—

Evaluation of the Exercise to Raise Motive of the Nursing Practice

—Just Before Basic Nursing Practice II—

大川百合子^{*1}・前田ひとみ^{*2}・山田 美幸^{*1}・加瀬田暢子^{*1}
長友みゆき^{*1}・坂下恵美子^{*3}・津田 紀子^{*4}

Yuriko Ohkawa^{*1}・Hitomi Maeda^{*2}・Miyuki Yamada^{*1}・Nobuko Kaseda^{*1}
Miyuki Nagatomo^{*1}・Emiko Sakashita^{*3}・Noriko Tsuda^{*4}

キーワード：構成的グループエンカウンター，リフレクション，エンパワメント，
基礎看護学実習

structured group encounter, reflection, empowerment, basic nursing practice

I. はじめに

A大学看護学科では，2年生の後期に患者を初めて受け持つ基礎看護学実習Ⅱ（以下，基礎実習Ⅱとする）を行っている。学生にとって，2週間という実習期間や看護過程の実践に加えて，他者との人間関係作りなど，多くのハードルを越えなければならない実習である。学生は，自らの責任において他者と1対1で関わるという体験に乏しく¹⁾，緊張して気負い，構えている状況が想像できる。実習で経験する様々な課題を克服するためには，自己及び他者を理解しながら，自己の行動を変容させていく力が必要である。

昨年我々が実施した新入看護学生に対する構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter，以下SGEとする）とリフレクションを取り入れた「仲間づくり演習」では，学生の「自己理解」や「他者理解」への意識を高め，仲間と共に成長する「仲間作り」に寄与できた²⁾。SGEとは³⁾，仲間と体験（感情・思考・事実）を語り合うことで自己や他者を理解し，自己認知の

修正を促す方法である。リフレクションとは⁴⁾，自己の経験を探求することで自己認識を深め，人間としての成長を促す方法である。この二つの方法は，他者との交流を通して，感情の変容と新しい行動を生みだし，さらに自己実現できるようエンパワメントする効果があるといわれている⁵⁾。以上のことから，基礎実習Ⅱの前にSGEとリフレクションを取り入れたプログラムを体験することより，学生がこれまでの自分から1歩前に進み実習への動機付けを高め，仲間と共に成長しながら，初めての長期の実習を乗り越えることができるのではないかと考えた。今回，SGEとリフレクションを取り入れた実習直前演習（以下演習とする）に対する学生の反応や評価を明らかにしたので報告する。

II. 方法

1. 対象

対象はA大学看護学科2年生で基礎実習Ⅱ（2単位）を履修する63名である。

*1 宮崎大学医学部看護学科 基礎看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

*2 熊本大学医学部保健学科 臨床看護学講座
Department of Adult Nursing, School of Health Sciences, Kumamoto University

*3 宮崎大学大学院医学系研究科修士課程（看護学専攻）
Master's Course of Nursing Science, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

*4 元宮崎大学医学部看護学科 基礎看護学講座
Formerly, School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

表1 演習プログラム

テーマ	私の基礎看護学実習Ⅱの目標は…
目標	1. これまでの振り返りから、基礎看護学実習Ⅱにおける自分自身の目標を見いだしましょう 2. 実習グループの仲間が互いに成長できる人間関係を作りましょう
時間	プログラム
9:00～	本時の進め方、グランドルールの説明、エンパワーメントに関する講義
9:25～	①オープニングエクササイズ Where are you? 「Bear in the Tree」の絵を見て、どれが今の自分のイメージに近いか選び、その理由を書き仲間に説明することで、自己の気づきや自己開示につながる。演習後にも実施して自己の変化に気づくことができる。
9:40～	②仲間からの花束 付箋に簡単なメッセージを書いて交換し、その付箋を花に見立てて、自分が描いた花かごに飾って、名前をつける。他者からもらったメッセージから自分が気づかない自分自身の他人への印象を知ることができる。
10:50～	③Let's a walk and touch! 自由に歩き回りながら、挨拶を交わしたり、握手したりすることで人との関係づくりについて考える。 ④Positive Stroke 2人一組になって相手の素敵だなと思う部分を言葉で伝える。伝えられた人は新たな自分に気づくとともに、温かいメッセージを浴びることによって自尊感情が高まる。
11:10～	⑤私の好きなもの 好きなものを描くことによって、自分が人生で大切にしているものを考える。
12:00～	昼食
13:00～	⑥私たちここが似ているね グループメンバーの共通する部分を探していき、そのプロセスで感じたことから仲間の意味について考える。
13:30～	⑦私の看護学生物語 大学に入学してから今日までを振り返りどのような出来事があったか、またその中で自分がどのような感情の揺れを感じてきたかを1本の線で表す。そのグラフを基に感情の揺れが自分にとってどのような意味をもたらすのかを考える。
14:20～	⑧実習の目標と実習後の素敵な私へ（リフレクションに関する講義） 基礎実習Ⅱの自分の目標とその目標が達成された時の気持ちについて考え、目標達成のためにどのような行動をとればよいか、仲間と話し合うことで見いだしていく。

* ①～⑥がSGE、⑦⑧がリフレクションに関連するものである

2. 演習の展開方法

基礎実習Ⅱは後期試験直後の2月に実施している。1グループ5～6名で構成し、12グループを前半・後半グループに分けて実習する。この演習は、前半グループには病棟実習前日の実施であったが、後半グループにとっては病棟実習1週間前の実施であった。

演習はA大学内の100名程度収容可能な小ホールで行った。所要時間は、約5時間であった。学生以外の参加者は基礎看護学講座6名の教員と大学院生1名であった。SGEの講習を受けた教員がリーダーとして、その他はファシリテータの役割をとって表1の通りに進行した。まずリーダーがこの演習の目的と実習との関連、参加者がリラックスして参加できるよう「守秘義務を必ず守る」「批判的、または決めつけにならないようにする」などの8項目のグランドルールの説明をした。また、自己開示をする内容のプログラムでは、自分の答えられる範囲で表現し、言いたく

ないことは無理に言わなくてもよいことを説明した。

3. データ収集方法

1) 演習前後の自己のイメージについて

演習の前後に2つの調査を行った。ひとつはRosenberg⁶⁾のSelf Esteem尺度(星野命訳、以下SE尺度とする)で、「私は全ての点で自分に満足している」「私はときどき、自分がてんでだめだと思う」などの10項目からなり、4段階法の合計点で自尊感情の評価をするものである。ふたつめはBear in the Tree⁷⁾(図1)によって「今の自分のイメージ」を調査した。Bear in the TreeはC. バルマンらがリフレクションスキル開発のための演習で使用している図で、大きな木の根っこや枝にいる①～⑳のBearのうち、学生が自分のイメージに近いと思うBearを選び、その選択理由を書くものである。これらの調査票により演習前後で学生の自己に対するイメージの変化を見

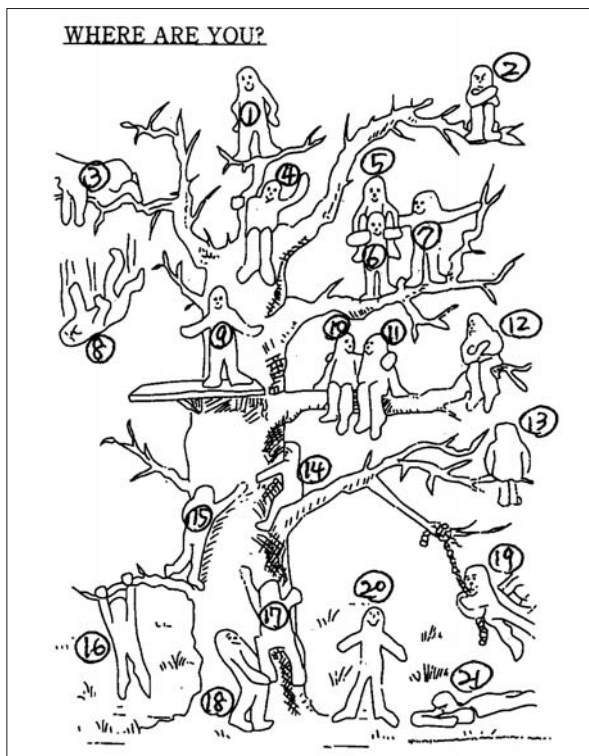


図1 「Bear in the Tree」
文献7)より引用

ることができると考えた。

2) 演習内容の評価について

演習内容の評価は、R.Hoste⁸⁾⁹⁾が開発した25 Semantic Differential Questioner (以下25SDQとする)にて調査した。25SDQは「創造的な／平凡な」「深い／浅い」など25項目の形容詞からなる教育評価スケールである。＜印象に残ったこと＞＜意外だったこと＞＜将来役に立つと思ったこと＞＜残念だったこと＞を自由記載として加えた。

これら3つの調査票は演習時間内に書いてもらい、会場内に設置した回収箱で回収した。なお、SE尺度とBear in the Treeは出版社から、25SDQは著者から使用許可を得ている。

さらに実習に対する演習の効果を、実習の前半グループと後半グループに分けて、「役に立った・どちらともいえない・役に立たなかった」の3段階評価とその理由を自由記載として実習後に調査した。回収は1名の教員のポストを指定し、投函されたものを研究参加に同意したと見なしデータとした。

4. 分析

SE尺度は4段階法で、各項目に4～1点を配点した。演習前後のSEを比較するために対応のあるt検定を行った。25SDQは7段階法で各項目の肯定的な評価の順から7～1点を配点した。基礎実習Ⅱ終了後の演習評価は、前半グループと後半グループの独立性のカイ二乗検定を行い、グループ間の比較をした。統計処理はSPSS14.0Jを用い、5%未満を有意差ありとした。自由記載は類似した内容ごとに分類した。

5. 倫理的配慮

この演習は基礎実習Ⅱの一環であるが調査票の提出など研究の参加は自由で、成績に関係しないこと、研究結果は学会などに発表することを口頭で説明した。同意の有無を調査票に記入してもらい、全調査票を回収した。調査票は全て無記名とし、個人の特定ができないように学籍番号とは関係のない番号札をランダムに配布し、その番号を調査票に記載してもらうことで演習前後の変化を比較できるようにした。

Ⅲ. 結果

演習当日は1名欠席者がおり、参加した学生は62名であった。

1. 演習前後の学生の変化

1) Self Esteemについて

SEは57名から回答があった(回収率91%)。演習前のSEは24.47点、演習後のSEは25.14点で演習前後では得点に有意な差はなかった。全体の平均点以上であった学生を「高SE群」31名、平均点未満であった学生を「低SE群」26名にわけて演習前後の点数を比較したところ、「低SE群」は演習前が20.00点、演習後が21.04点で、演習後に有意に得点が上昇していた($p < .001$ 以下)。

2) 今の自分のイメージ

「今の自分のイメージ」は、演習前は59名(回収率95%)から回答があり、演習後は54名(回収率87%)から回答があった。

演習前は⑭のBearを選択した学生が最も多く

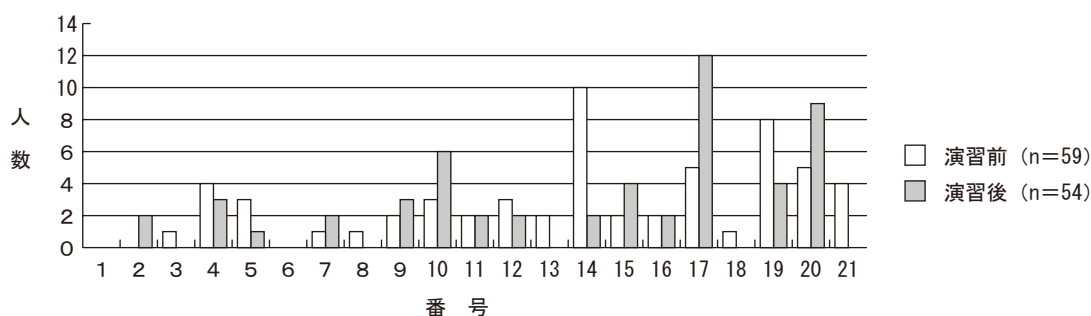


図2 「Bear in the Tree」で選択した番号：演習前後の比較

表2 「Bear in the Tree」の選択理由（一部）

<演習前>

n=59

カテゴリ名 (データ数)	データ
定期試験に関する感情 (16)	<ul style="list-style-type: none"> • テストも終わったところで一休み。 • テストも終わって、実習も後半なので今は解放感でいっぱいだから。
周りを見渡して居場所探し (11)	<ul style="list-style-type: none"> • 周りを客観的にじっくりと観察していて気づくことがたくさんあることを感じてきたから。 • 上ばかり見ている。何かしたくてたまらない。たくさんの希望や夢はあるけれど、漠然としていて行動せずにいる。
安心したい (10)	<ul style="list-style-type: none"> • 何かに対して不安で一人で居たい気もするけどそれを誰かに救って欲しい、誰かと関わっていたい。 • 実習のことで不安、テストのことで足元がグーラグラシがみついています。
支え・支えられている (7)	<ul style="list-style-type: none"> • たくさんの支えがあって今があると思うから。友達とか家族に助けてもらっている。 • 肩車している二人を支えたい気持ち。
今を謳歌 (6)	<ul style="list-style-type: none"> • 今は皆と話したり笑ったりできて一緒にいられるのが楽しいと思うから。
未来に向かって前進中 (6)	<ul style="list-style-type: none"> • 色々と未来に向けて頑張っていこうというときです☆

<演習後>

n=54

カテゴリ名 (データ数)	データ
仲間とともに頑張る (20)	<ul style="list-style-type: none"> • すぐく皆の存在に気づいて1人じゃないんだ、辛い時には皆がいるんだなと気づくことができ少し不安が消えた。 • 1人でも頑張らないといけないけど、お互いに支え合って自分を高めていきたい、高め合っていきたい。 • これからの実習を仲間と一緒に頑張っていこうという気持ちが見えると思ったから。
自分の力で前進 (19)	<ul style="list-style-type: none"> • 人に支えられながらだけど、しがみついているだけでなく、自分でも登っていこうと思うから。 • 自分が今何をすべきなのかしっかり目標を定めて上へと登る準備をしている段階だと思うから。
自己を見つめる (7)	<ul style="list-style-type: none"> • 途中まで登っていたいと思ったけど、全然登っていなかったんだなと思った。今の自分があるのは⑩のように支えてくれる人がいるからだと強く思いました。
緊張の緩和 (4)	<ul style="list-style-type: none"> • 実習に行く不安はまだあるがクラスメイト達とリラックスできて実習に向けてポジティブになってきた。

10名で、以下⑱⑳等の順であった（図2）。演習後は⑰のBearを選択した学生が最も多く12名で、以下⑳⑩などの順であった。選択理由の記載からは、演習前は56のデータが抽出され、「定期試験に関する感情」「周りを見渡して居場所探し」な

ど6つのカテゴリに分類でき、演習後は50のデータが抽出され「仲間と共に頑張る」「自分の力で前進」など4つのカテゴリに分類できた（表2）。

演習前の低SE群7名は、漠然とした不安を理由に⑭のBearを選択していたが、演習後④⑫⑭

⑮⑰⑳を選択し，“皆と一緒に実習に向けてがんばろう”“自分でも登っていこうと思う”など肯定的な理由に変化していた。演習前の高SE群は，テストの解放感を理由にした学生が6名であったが，演習後は“今から実習に向けて頑張っていく”“お互いに支えあっているんだなという気がしたから”という理由でBearを選択していた。

2. 演習に関する学生の評価

演習内容の評価となる25SDQでは61名から回答があった（回収率96%）。平均得点は5.27±1.01点であった。各項目の中央値は「創造的な」など7項目が6点，「速い」が4点で他の17項目は5点であった（表3）。自由記載は，「様々な価値観とのふれあい」「自己の発見」等に分類できた（表4）。

表3 25SDQによる演習の評価

項目	中央値	平均±SD (点)
創造的な	6	5.84±0.97
深い	6	5.58±1.02
興味深い	6	5.78±1.12
貴重な	6	5.85±0.98
よい	6	5.61±0.95
(学習課題に) 関連した	6	5.68±0.93
有用な	6	5.51±1.00
明確な	5	5.20±1.00
満足な	5	5.47±0.84
能動的 (積極的)	5	5.42±1.20
適切な	5	5.27±0.85
大好きな	5	4.78±1.04
説得力のある	5	5.24±1.08
誠実な	5	5.33±0.88
首尾一貫した	5	5.07±1.02
実践的な	5	5.31±1.05
自由な	5	5.39±1.10
刺激的な	5	5.23±1.09
楽観的	5	5.10±0.94
一定した	5	4.71±0.97
やさしい	5	5.33±1.13
きわめて重要な	5	5.17±1.01
(経験の幅が) 広い	5	4.95±1.17
(経験が) 多い	5	4.77±1.08
速い	4	4.13±0.95
平均±SD (点)		5.27±1.01

表4 演習の評価 自由記載

n=61

項目	カテゴリ名
印象に残ったこと	「様々な価値観とのふれあい (30)」「自己の発見 (28)」「仲間の発見 (4)」「楽しい作業 (20)」
役に立ちそうなこと	「コミュニケーション技術 (33)」「自己の発見の手段 (21)」「他者との支えあい (9)」
意外だったこと	「自己の発見 (20)」「他者の発見 (20)」「演習内容 (12)」
残念だったこと	「時間配分 (12)」「うまく表現できなかった (10)」「実習に対する不安 (3)」「自己に対する不安 (3)」

()は記述件数

表5 実習終了後の3段階評価の理由 自由記載

n=53

評価	カテゴリ名
「役に立った」	「自己の発見ができた (12)」「コミュニケーションに活かされた (8)」「団結ができた (4)」「心の支えができた (3)」
「どちらでもない・役に立たなかった」	「思い出す余裕がなかった (12)」「実習との関連が不明瞭 (8)」「知識・技術の確認の方がよかった (3)」「変化なし (3)」「不安 (2)」

()は記述件数

基礎実習Ⅱ終了後の演習の評価は53名の回答(回収率84%)があり、「役に立った」が24名(45.3%)、「どちらとも言えない」が24名(45.3%)、「役に立たなかった」が5名(9.4%)であった。前半・後半グループでの評価に差はなかった($p=0.77$)。自由記載は「自己の発見ができた」「コミュニケーションに活かされた」等に分類できた(表5)。

IV. 考察

1. 演習による学生の変化

今回のSEの結果は演習前が24.47点で、これは一般的な青年期の自尊感情レベルにあり¹⁰⁾、演習後は25.14点と有意な差はなかったことから、全体的に見ると演習は自尊感情に影響を与えなかったといえる。しかし、低SE群においては演習後に有意に得点が上昇していた。このことから自尊感情の低下していた学生は、演習によって自己を「これでよい (good enough)」とする認識の変化が生じたと考える¹¹⁾

演習前後の自己イメージの調査では、演習前では実習前の不安な気持ちや、試験終了の安堵感を表した学生が多かったが、演習後は実習や今後の大学生活を仲間と支え合いながら、前向きにチャレンジしようという気持ちの変化が伺える。低SE群の学生も、自己や実習に対しての不安を理由に⑭を選んでいたが、演習後は仲間に支えられて将来へ登り始めているイメージを理由に④や⑳等を選んでおり、仲間との連帯感、自己の可能性の気づきへと変化している。アイデンティティの確立がまだ不十分で、人を受け入れたり、人から受け入れられたりすることに慣れていない学生にとって、他者からの働きかけを感じ取りながら自分の考えや行為を吟味し、その中から自己を発見することは簡単なことではない¹²⁾。SGEは、そのような困難をエクササイズを使って心をほぐしながら他者と関わり、自己発見の機会を作るといえる。また、SGEを体験することで自己肯定感が高まり、自分を「これでよい」とエンパワメントする力が生まれたと考える。

演習の内容に対する学生の評価は、25SDQの

中央値が「速い」以外は5～6点であったため、概ね肯定的で良い評価を得られたと考える。演習後の記述では、“一体感がうまれてきた”“皆温かいと感じた”など、他者とふれあうことの良さを実感していた。また、“自分が思っていなかった様々なことまで発見できた”“何かを書くことで自分が何を考えているのか少しわかった”など自己の発見にもつながっていた。自己発見はリフレクションの中核概念で専門職として必要な能力であり、この演習を通して学生自身の内面だけでなく、看護師としての成長も支援できると考える¹²⁾。

残念だったことに分類された「時間配分」と「うまく表現できなかった」は、“時間が短かくて思いを伝えきれなかった”“自分の意見がなかなか言えなかった”というものであった。このような感情表現には、信頼できる仲間や自由で安心できる雰囲気が必要であるが、さらに適切な時間配分が重要であると考えられる。「実習に対する不安」「自己に対する不安」については、演習によって、自己の目標がはっきりしていないことに改めて気づいたことと、目標はできたが実践できるのかという2つの感情が生じていた。学生はこれらを<残念だったこと>に書き、ネガティブな感情に思われるが、今の自分の状況や感情に気づいたことは行動変容につながる第一歩であると考えられる。

2. 基礎看護学実習Ⅱに対する演習の影響

基礎実習Ⅱ終了後に行った演習に対する3段階評価は、前・後半グループともほぼ同様であった。自由記載では患者とのコミュニケーションのとり方に工夫を凝らしたり、グループメンバーと団結したことや、自分に少し自信をもって実習に臨んだことなどが書かれ、自己肯定感を維持し、演習での経験を実習で実践していたことが推測される。

ただし、“お互いをほめることが一体何の役に立つというのか”、“もっと看護技術の練習や情報収集がしたかった”などの記載があり、看護技術や看護過程に不安を感じていた学生は、積極的に演習に参加できなかったことがわかった。演習の時期が試験終了後で自己評価が下がっていたことも要因としてあげられる。したがって演習の時期

を考慮したり自己学習の時間も確保することで、この演習を補完し相乗効果が得られると考える。SGEやリフレクションはその過程で抵抗¹³⁾や痛みを伴うと言われている¹⁴⁾。上記のようなネガティブな感情を引き起こす可能性もあり、このような演習を実施する場合は「肯定的・否定的な両方の側面」があることを認識し、必要な支援についても検討しなければならない¹⁴⁾。

V. おわりに

SGEとリフレクションを取り入れた演習により、学生は自己および他者の理解を深め、自己の可能性を拡大したり、他者との連帯感を導き出した。このことから自己を肯定し、仲間と共にいることを支えに実習での困難も乗り越えていこうという、実習への動機付けを高めたと考える。

今後は、適切な演習時期や時間、自己学習の併用についても検討し、学生が看護を学びながら自己成長できるように関わっていきたい。

文献

- 1) 中西睦子：臨床教育論 体験からことばへ，65-84，ゆみる出版，1992
- 2) 加瀬田暢子，前田ひとみ，山田美幸，他：新入看護学生に対する「仲間づくり演習」の評価ーエンカウンターとリフレクションの概念を取り入れてー，南九州看護研究誌，5(1)，1-10，2007
- 3) 國分康孝，國分久子，片野智治，他：エンカウンターとは何か，24-26，図書文化，2000
- 4) 本田多美枝：看護における「リフレクション (reflection)」に関する文献的考察，Quality Nursing，7(10)，54，2001
- 5) 津田紀子，前田ひとみ：リフレクションのエビデンス；クリティカルシンキング能力の育成，臨床看護，32(12)，1701，へるす出版，2006
- 6) 遠藤辰雄，井上祥治，蘭 千壽編：セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求，26-27，ナカニシヤ出版，1996
- 7) 田村由美他：リフレクションを行うために必要なスキル開発，QualityNursing，8(5)，51-57，2002
- 8) R. Hoste：Course Appraisal Using Semantic Differential Scales，Educational Studies，7(3)，151-163，1981
- 9) 澁谷幸，中田康夫，田村由美，他：模擬患者を導入したコミュニケーション演習の意義ー学生の受け止め方に対する分析を通してー，看護教育，46(7)，574-579，2005
- 10) 菅佐和子：SE (Self-Esteem) について，看護研究 17(2)，24，1984
- 11) 前掲書6)，26-27
- 12) 縄秀志：臨床実習の意味についての一考察ー経験するということ・学ぶということ・ケアするということー，Quality Nursing，4(2)，28，1998
- 13) 前掲書3)
- 14) Burns, S. and Bulman, C. (田村由美，中田康夫，津田紀子監訳)：看護における反省的実践ー専門的プラクティショナーの成長ー，256，ゆみる出版，2005